

## 第8回 aaca サロン開催報告 ランドスケープとライティングデザイン それぞれの環世界

株式会社 梓設計 アーキテクト部門  
チーフアーキテクト  
山田修爾



ヤーコプ・フォン・ユクスキュルが提唱した「環世界」。世界は1つの環境ではなく、生物各々が主体的に構築する独自の世界であるというこの概念は、異なる生物同士だけでなく、職能によって、さらには個々人によって異なる環世界を持っていると言えます。今回はランドスケープデザイナーの堀井さん（Landscape81）、ライティングデザイナーの麻田さん（Genius loci & Lighting Design）をお呼びし、両氏のプロフェッショナル領域における環世界を覗かせて頂きました。

堀井さんの環世界では、敷地周囲やその奥に広がる風景との関係性そのものに視座を置きます。

レジャーリゾート旧軽井沢（ペット同伴ホテル）においては、軽井沢の美しい借景を取り込み、建築と周辺環境を同化させるだけでなく、ペットとシェアするホテルという世界観を拡張させ「周辺の動植物とシェアするランドスケープ」の視点で再構築。堀井さんにとっては小さなリスもプロジェクトの一員になります。

宇部市ときわ動物園では中南米のクモザル等の展示エリアをご担当。中南米と宇部市という異なる環境下で、生息地を純粋に再現することは困難です。そこで「背後に南国」をキーワードに展示スペースの遠景や中景に南国の植生で形成し、手前にはメンテナンスにも配慮した日本の植生で整理。日本庭園の遠近法のように整理することで、シークエンスの中で南国を感じ、動物越しの借景としての南国を提供しています。

上野動物園パンダのもりでは「上野の主演であるパンダはどこからでも見なければいけない！」ための園路と展示スペースの地形操作が特徴的です。展示スペース際の園路を最も低いV字型の地形とすることで、死角の無い展示計画と、その奥に上野東照宮を仰ぎ見るダイナミックな風景をつくっています。

麻田さんの環世界では、SNS的な写真のフレームでは捉えきれない「状況の体験」を提供しうる光空間に視座を置きます。

NOBORITO GATE BUILDING（テナントビルと2世帯住宅の複合建物）は、2つの住戸とその間の中庭、そして奥の街の風景が連続的に繋がる抜けのある空間構成が特徴的ですが、光環境としては壁面を照らさず家具のみを照らし、連続性をカット。そうすることで周囲の街の風景のように点在する光と呼び寄せ、光環境として都市との連続性をつくりだしています。

シネジック新社屋は、平面トラスと三角形のCLTパネルによる大空間が特徴的なプロジェクト。

床面への十分な照度が求められたため、複雑に変形する架構に対し、ダウンライトをワイヤーで吊るすだけのシンプルなデザインで整理。このシンプルさによって既視感の無い不思議な空間となっています。

ZOZO 本社では繊維のように小さな木材で覆われた大きな大空間が特徴的な空間に対し、その木材のディテールの中に光源が全く見えないように照明を配置。大きな天井面を直接照らしたくなるところ、絞り込んだ床面への照明とその反射による仄かな光に照らされた天井面が、住宅に囲まれた静かな周辺環境に対して行燈のような光を提供しています。

ディスカッションの中では、とある煌々と照らされた樹木の写真に対し、そもそもこれは樹木が主役なのか？という議論に。

小さなベンチを照らす外灯と、その奥に薄らと見える樹木の写真には、お二人とも「こっちのほうがいい！」（私も！）という瞬間が印象的でした。主役は利用者（或いは人のいる風景）というお二人の環世界が重なる瞬間でもありました。それぞれの職域や見る目、環世界が異なっても、その先に見たい風景を共有していく作業、共有できた瞬間は、デザインに限らず心が躍ります。

今回のサロンでも新しい環世界を覗き見れることを楽しみにしたいと思います。



シネジック新社屋



上野動物園パンダのもり



NOBORITO GATE BUILDING